七柏集

中村俊定文庫
文庫 18
574
3

宮城県図書館蔵

公

ゆゑ無沒所より日蓮上人の標札其時乃家居
弘長の昔より今弘法池奥の災ふかるらん
風破なくの玉ゝひなく今年又百有餘年
むかもとゝゝりけきさのゝ孫々人も所殿の
ありさまなるべし

蓼太文庫

中村俊定文庫

蓼太

標札も久しき代や蔓木立
鄙なくさまあり田ゝ之麦 搗壽梁
赤ゝくと君の鳥帽子の紅解て 花盟
実 指折ハ蘇よの法なり 宦鼠

月ぞ〳〵ぬる〳〵俤の雲かくれ　菴中
略乃　留もしろく　澄乃はく〳〵　七澤
ウ
猶惜ふと長きて梨子をむきなのう　梁
見ひとり侍〳〵髪結ふゆく　盟
無風の松立も既ゆるなれ　鼠
あか油乃是を　給る灰　太
井戸もふる系く　旅大工　澤
京〳〵文行　三井の　吉寺　中

志井ゑ月　拾ひ　世〳〵　友ちとり　盟
笠乃　吉　文ふ　眠る　砌　取　梁
ふるなくと　ふれ　無を　ふ　ふし　太
茅　鞋　紙〳〵ハ　鶏　ふる　や　澤
蝶〳〵も　仰乃あ　ふ　北　花の連　中
ウ
雲〳〵れ　形　井ふ　茅　ま　き　ひ　鼠
十
節　志　め〳〵二日　灸を　掃　ふ　梁
子の　紙　ま　毋　関乃　孫　六　太

紫濃仮の引ふひれを裏　盟
雪乃降るしれこハ網を汁　澤
妹許の四川を思ふ者　鼠
背牌乃浮名あるかるる　中
仲原の書国かくれかるなし　太
蝶ハ伽馬を咲つきの浦　梁
京物ゑ神のむくゝ毛乃透通り　盟
むゝ氣ハ加指の頼ひ遠よる　澤

霧霧不知ゆくゝ身北縁ゝ　鼠
落まし乃北秋の秋あし　中
ナウ
寄ハ添ゝ石伏樓さゝれ水　澤
仙伏祢乃舎人を乃指　太
板家川小雨降しゝ歩こ　中
かしこハ嫁ゝと山をひとさり　鼠
初花の奥秋毋しき紀のよりな　梁
とうを遠るいとゆ乃糸　盟

豆州蛭小島

仲間や国極まみる青丸身　蓼太

日暮るゝ花かつゝ堰乃栄橋　斗瀧

万葉北古ゝの墓を傳まゝ　巴水

をゝ年まゝゝ新もなゝ　児店

呉竹ゝ新乃小庭ゝめの野　寛鼠

三絃持て雪のタゝれ　斯文

撥乃冴て蒲団ゝ　瀧

絃くもれゝ果ぬ理趣分　太

たれ迄ゝ翠簾の遍照まゝ　店

探ゝ髪乃古風迄かゝれ新　水

喰さゝる蔓蠶ふ楽を摘あゝ　文

傍ふもゝんと甲斐伝説領　鼠

いさゝの間ちゝゝふ月あゝ　太

寿永乃秋を琵琶ゝる人　瀧

雲霧の上ふりたる小脇差　水
御立　城の奥ハさるく　文
花ハ咲さそれハ雪成　鼠
撫　技指服のいつも三月　店
十　毫毫ふかく源氏の札付　仝
貼の浪瀬のよ〳〵　太
麦搗〳〵忍ヶ岡も　流
脊中たて帯ハ又多くく　水

時雨降ぬ雲の軍〳〵おひ　鼠
消てハ御る松明の書　文
塗こめの神秘を開く達の言　太
冠の日の光　白髮の君　店
唐土北山仙〳〵ふ嘘ばかり　水
皆番　墨〳〵書る麦ハあ〳〵ます　流
寺ひ〳〵月立屋と晴ら〳〵　文
須ヶ　冷〳〵波もおちまて　鼠

秋風乃連ゝを吹く　店

かはく袖笠肘笠の面　太

朝日北幕席ゝ袁蒙ゝ　鼠

猫の機嫌も負はけり　文

三つ子なり姫ゝ川ゝ蝶　流

七夕堤の摘とりもの　水

亟州江馬　蓼太

蕉の葉乃ゝ歩行の都風

暖簾ぬきの表の風　如白

山猫活ゝ番姫りて　李下

月出ゝ狐も子も有ゝ　官鼠

掃捨ゝ枝の葉ゝ身乃嘉　班石

まゝ子孫也る鶏ゝ海　太

ウ 稲荷の芝も洗はれて白
合天井乃絵の奥かしく　卜
下馬石ふ姫姫の昔矢形の　鼠
施茶頼ひの祈氣引たる　石
投ふ乃ふ　濃の卜その毎　太
別邸うま清つ　ついうれ鶏　白
あさ妻の浅風毎ふ者明て　卜
遥うて秋よ乃ふき　山く　鼠

ひ弟やひけ滝ハ接樓（今ハ）　石
意地ふ痩たる老の法帯　大
清清よ花の廣間乃頃迄　白
菓子ふも副て狐裏春　卜
十 入唐を乃そやし　十 笠震　鼠
芝たくくと　婆く北一指　石
森の風起せと舞ふ　白
恋も律義よ紀伊の山法　卜

踏ちらせし夜の雪ゑあつまる　鼠
日　糸ハちれ尺しへ〜ゑ蛾なり　太
皇紙ゑ守に漬と銘餅と　石
波寝ちゑ少ゑ兎車のかち頁　白
羅乃風ゑ梅ゑ神　枝　ト
二八の尼ゑ　涙ちゑ　石
榛（ハシバミ）年月乃朔く茅帝　太
霜　歯　船ちく　竹の表ゑ　鼠

所（ところ）ゑ糸信ひ乃石信水　白
十三床の　月　慢毎ゑく　ト
成的ハ裸ちくゑふ仕合　石
ゑゑ箱乃帝しちる　太
仲の戸乃跡も花ゑ訪迄てハ　鼠
笑りぬ山も今ゑりゑ

駿州沼津

客たちて蜩鳴きわたる月夜哉　琴太

登廊下の篝の影ちらつ　雪濤

波ちらつく入帆の赤けし競ふん　白峯

皆酒くさき紀人はうなゐ　弄汐

三方ふ子北の小松雪なのり　五竹

能とちらつ多きちり表　桂鼠

暖な納屋の立ち新しほのれ　富鼠

蓮如　迎ひ乃物も悴も　太

釣風の笠ちらつと明ちう　濤

き田たれハ皆外ら濱　竹

歩つけふ仲人ちゆふくりれと　汐

採ふ毒ぬもみ海なるし　峯

青板の草も霞乃九十九髮　桂

蕨かんくちふ市中北月　宜

夕の秋乃名残指南を無念かり　太
竹人の逝る孫ふ既望をく　沙
年くふ花咲寺を指崩し　濤
棚手　衝物把乃ゆるく　峯
打ようと離別の俺ふ酒五臣　竹
妹山城をたて　姉ゝり連　桂
百仲のたゝかふくもなりより　太
箕乃俳名の年を頬杖　宦

家をきれかゝこを歳と古筆市布　沙
裏行者のさゝまあるゝ　竹
樹抜ゝ忘れ時分年年　峯
七枚ゝても母の涙外　濤
毛たゝけなて市像乃利ハ　宦
岩かゝ裂ゝ流乃福川　沙
楠さゝく月の夕鍋の忍ま麦　桂
菓の八日もまゝひとゝの　太

ナウ
牛の戸乃荘子ゑる秋の蝶　潘
さゝゝの辻子ふ板さゝゝく　峯
出ふ形乃通りと志ひ迄　宦
前追ふ多も十ゝ遠なり　桂
をつゝ掃ぬも雲の乃ぢゝ　竹
出そゝ里の風る船乃他以　執筆

春蛇亭奥行　琴太

水仙や根ふ白玉のされハ子ゝ
庭ふ歌と影冬乃いとゆ　藪府郎娥
三賢八背形ゝ北掃入ゝ　月巣
午時を貝如く山のふとゝ　太
孫私可月乃の大豆乃片仮　娥
物ハこの秋　都女公　巣

乙酉も海道元新乃ゝの長ゝて　太
大會小稽ゝ蕭ゝなゝなる　城
義鞠を小根ゝ武士の一色の里　巣
月涙ふ石ゝ彼思て　太
あゝ板ゝ八雷もいゝたゝ墨　城
殺ゝとたのむ乃里の早苗振　巣
ゝも見も下ゝ料ゝて海線　太
ゝゝ地氣ゝゝ吳服高ひ　城

壱巷の庭を稽と取出し　巣
温泉も湧ゝる表中北角　太
雖ゝ花ゝ雲橋ゝくらん　城
角八望れゝの第鞠境界　巣
腰ゝゝゝ井ゝゝゝ碁友達　城
牡丹を美ゝ北日ゝゝく　太
ゝ三花ゝ四花掃ゝ撥簾　巣
鳥を活ゝゝ二代氣ゝ入　城

器物よ氷のまゝ乃千住鮒　大巣城

市もあゝしよ鷲北明神　巣城

先祖より妻の母の発意物り

を迎うとそのり脱北あり　太巣城

注ものゝ顔討乃見まゝ遠住也

面白く年ひま来みゝり　城

夏明の網具ゝ多ゝ人とのゝ　太

旅乃きゝひの場よ絵むゝ

ナウ

峰入と思ひのまゝ北柿ゝも　巣城

子ゝ所ゝ酒乃たのゝ

傘ゝ三日漫てと海ゝぬゝり　城

魚ゝ多北陸ゝ来ゝれの関　太

乃ゝ乃と来ゝ海ゝらと芸ゝ川心　巣城

風　和ゝゝ小　眠ゝ　むゝ

森露窟奥行　　蓼太

青柳や曙の地よりもえ出て　　茶腹

綱くかくく橋乃素面　　梧泉

萩入乃元彼岸を家にと年　　月巣

松くく酒の尾ゝ尺出るなり

俵あ也葉も八束は月の秋　　茶

苔ひとかゝえ榎ぢひえ乃　　太

古ひとよりふおだらも神送　　巣

ゑハ姉るゝとと老の組板　　泉

恥入さ厠を供奉一歩あの　　太

吹ちるこゝ北麿も紅葉踏　　茶

岩ちゝて素白ゝ乃葛ゝら　　泉

家ゝら痩ゝ鉄輪ゝくく　　巣

さされハ塵なきもゝの十寸撓　　茶

廓ハ淋しゝ岡とゝくハ　　太

蓮穢の極楽水一口の清道　菓
花さきちらし紅はなる川蝶　泉
日の表と月見しら藤乃ふる一里　太
よしやさ腐の歯固はせん　茶
十門守れたる一生を這くらし　泉
人もなき形なる後松の姿　菓
切てやる指のおとひ乃姫のこ仲　太
さ湯ぶしまれ鶯もとろく　泉

地よりふ掛ふる男とふ人稀も　茶
清士脱撥ふ板もきえ侍　菓
十月九眠り望稀なる和歌なり　泉
寄人とふ第のさる染乃戸　太
も屋ふ寄季の月九物ひとり　菓
鍵　製　なるう　拾　ちまく　茶
志発ふ垣ふも二日三日九月　太
秋ふ春ふまる製鉄池　泉

チウ

茶

菓

泉

太

菓

茶

の俺乃森鶯ひとふ病あり
たゝ梅を書はれ面の絵合
きもとの清水ふたゝ川瀬山
子を川流を引こゝ牛久るゝ
天和ゝ絵せぬ花乃庭竈
ゝ川と笑ひも千寿万葉

棲鳳居真行

蓼太

菅や伏佛の切火乃釜ゝ春
雲風おゝとも髮と白ゝ

筑府 楷泉

湖を曲代ふせきゝ
萱門ゝ去者ゝ祭

太

巻つゝれを各ゝ
巻の巻 菅のゝ

泉

う

綱くるくる魅の脚縄引張　太

潮まで高き入船引三法　泉

夕晴をさみる重豊のまゝ高のう　太

殺菜乾ひ入苞の篠の子　泉

ふハ菜ふ厨の寄干あしく　太

ひ、ゆんくと繁衣入絞ひ　泉

番匠の鉋かけて注ぐり　太

山下風強北冬の日あるを　泉

くるくる鉋の角ゝくると置　太

三つゝ三ゝゝゝ育河毒と　泉

花北日校月の横川と通　太

陽くるを重乾入菜仮物把仮　〃

十

乾ゝゝ冬ゝ入みる脚の長風　泉

安切高松高雲と孫先　太

吹ゝ玉ゝ陸ゝ陽帆も本の月ゝ　泉

風ゝ知ゝゝ天華北後　太

冠寺南まで出る
おいど拍子ひらけるを　太
年既解年限細なる道　泉
姫ゆくゆくこゝにきたれば祈願所　太
箪笥の出来の解もあり　泉
行くて踏まれし蝙蝠の声　太
月みる会ゆくゆく受戒入近ひ雪　泉
芋ゆゑ行しに出る家うり家　太

山ゆる出心を廉の角もなし　泉
森しをくゝと入る陶　太
行くゝ市も七つ入れるとこ　泉
杉丁場ゆくゝ道の野の新　太
三ゝゝ三義も人待咲をみ　泉
ゝゝ古寺へる寺入古道　ハ

月洗居真行

[illegible]　蓼太

芦　枯れ葉ぬ田千町　駿府　曳義

[illegible]　斑石

[illegible]　月巣

忘月の光[illegible]ぬ四[illegible]　義

[illegible]　十義　太

ウ

[illegible]　巣

[illegible]　石

之[illegible]　太

柳や蘇蔓[illegible]　義

[illegible]日抱之能の[illegible]　石

[illegible]　巣

法[illegible]　義

[illegible]　太

[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]ハ俄ニ俱の[illegible]
月[illegible]又[illegible]の[illegible]新
蝶[illegible]
[illegible]
八百[illegible]
[illegible]
[illegible]

巣
石
太
義
石
巣
太
義

[illegible]を蘇[illegible]
末の娘と縁[illegible]
千載ハ二首ハ[illegible]
[illegible]義[illegible]
[illegible]下[illegible]酒を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

石
巣
義
太
巣
石
太
義

さう
蕎麦の蕊刈をられく　石巣
世ゝ　さゝ　ぬ　お撫八枚　巣
まゆのいつくも固し青の稔　義
日和ゝ　昼よりゆ　ゝ　たゝ　太
ゝ　ゝ　雛を千本の花　巣
忠の帰入貝も　百いろ　石

静黙亭奥行

蓼大

来ゝ浅ゝ来ぬ秋あまゝ庵乃秋
月まち出ま蔵のさもり乃　後府 技老
唯婦ゝ乃ゝ北酒乃中酒く　秋耳
さゝゝく書の紙花せる　桃壺
川嘉を山ま稲ゝ　月幸
松　ゝ　ゝ　く　歳の下蔭　太

ウ

人別に菓子喰ませて春の庶　老
蝶やとる乃小作城とも　圭
かゝさしと羽織副きまるき　壺
連歌てゝゝ小原林し記　耳
かくたゝり強かるき世らな扶ふ松　太
たゝかゝひとりいさ信よせよ　壺
風呂吹年月寄ゝゝぬ通ひ盆　老
梅ハ名護屋の師走ワすゝ　耳

荷の内まゝ沙汰乃雲かゝま　圭
先とりたゝす　百日の顔　太
屠蘇ハ分れと氷解年志雛　壺
弧多の詩言乃寄く塗ぬ　圭
十
阿蘇陀も少しく富士振ゝ可　耳
何分むつゝし此私の小便　老
傘年ふせ市地乃ゝゝ孫　圭
あまをとゝく若元年ひ　壺

木像の祖師乃御流も夏よりて乃　太
古ちき　簫ふ何とも人ゝ　老
賛歌を行ひ雪ハ尚蘭麝　耳
海人まと城を枕ふもせん　圭
あ月ハ山とゝ移る海おもて　老
三日　海ハ宴　鬼もなし　太
嬰ふ嘱ふ房も月の露　圭
そゝ、に詩も哀ゝ　壺

十九

秋ぞ北雑更ぞ夏ぐし　鄙　耳
訪ハ行脚乃皮も老ふき　老
痛入俗投北条十そのり　壺
竹を口ふ夕日ぞ　耳
花と花数射の矢多川つき　太
鶏　手ハさも鶏乃宮中　翠筆

月連舎真行　蓼太

岩そゝぎ氷は落ちあり滝きし　巴明（飯府）

笠ゝゝ霞の松は老木乃　巣月

門舎人ゝ文箱ふいもち急ぐ　太

黙礼ひゝりあひしゝたり　明

寒灯こまゝ寂ぬ月の縁ゝ　巣

七夕乃比　蓼　無吹ちる

ウ

揺ゝゝ来人やゝて揺ゝ迎ひ絵　太

揺ゝゝ自刑のん白くまて　明

澎湃漸ゝ稲ゝ石もゝゝ　巣

むゝし入内は鏡稲ゝん　太

揺ゝゝ旅は石の箱乃ゝまり　明

忽墨る氣比の神風　巣

枯も生ゝゝ月乃ん乃代ゝゝ　太

世ゝ芭蕉巣の謡友遊　明

去帆　さそふ水吹きてし秋ハ　巣
たつ一くさ又あるよ夏五の義　太
同かしふ庵ふかく花をとゝめ　明
あハをと思へ　素雲崔骨　巣
十
振向くゝ梅ゝ帰洛のつゆ重　ハ
よゝハ勤さ十能古繼　明
幽灵をまんまと置ふ酒あるゝ　太
ゝハたとこふ嫌ゝ搗餅　巣

暮ゝ空ふ人月の冥ゝ砂　明
棒のみを色降乃ふ雪　太
廣蓋ふをゝれゝく屋かつゝ綿　巣
鑽川ゝつゝ紙奥ふ聲ゝく　明
忙紙と酒醒るゝ日ゝ年繰ふ　太
三夜さゝ後の居行ゝまゝ　巣
聖ゝゝゝ人ゝ色須ゝと霜ゝ了　明
ゝ意ゝ寺年形ゝゝ川ゝ　太

素隙よりもれぬ先の下小釉　太巣

老女の傳乃姫ぎみ　明

吸物もこゝろひかるてハ叶ます

くゞまいハ幕のうゝる　紫　太

むゝ屋乃近ひ車を花の蔭　巣

夏遠うゝ　麦　北吉　風　明

一書意の詞より拾ふ

水とゝゝ妹ゝ系瓜ハ荒より梁　蓼太

身を繞の墨のゝゝゝ　後府　菖人

思ゝゝ人後乃あ〜たれ片鶉　月巣

ゝゝ熟烟年祈るゝよ　太

紅梁を汐ゝゝ乃長枕　人

多ゝあハゝる冬の玄之　巣

ウ 大臣殿〻布施厄年〻八何くそ　太
階〻〻く裳裾ぬむ　まして　人
鶏の子と十ばかり十乃宮所　巣
連理乃姿　ふ面を中く　大
玉苗ばかりさいと手別き　人
柄杓の君乃風呂も汲也　巣
片肌ハ月ふも乃入せぬ入　痴　太
うき秋掛く　ふき言の峯　人

より香丁おぬ乃ハ　貸小袖　巣
肖年　くく　當世をのく　太
をまさ乃干潟ふ　ふ乃浦路を　人
ふとゝと関を出代ふ　太
ナ
その長ハ宮殿のさる　長さと　巣
庵〻〻　仮名乃ハ　人
給合ふ〻〻く　後る小さ　太
指と　切　き　高乃あ乃　巣

千ちゝ帰さ尾の松風傳ぬて　人
仮ゝ初織もさやかに乱れ　太
乃さ程乃ふにはゆくいとゝ迄　巣
あり乃や楽尾世紅葉さ浪乃　人
秋の日乃恨の玉くさ乃　太
身の本情も辻占も乃　巣
想ま乃る夫ゝ成ゝ撫子布　人
うしろめたくも乃ふハの乃　巣

ナラ
雷鳴乃りゝ姫ゝ尾乃九折　人
乃ゝハ絶ゝ神の御ます　太
乃ゝもと也女ゝつ者　巣
髮さゝ之茶屋乃肩ゝよゝく　仝
和國乃ひゝの中花の忘ひゝ　太
乃ゝ乃ひ離乃方代　人

醉月菴奥行

本ゝやあるふ世渡る帆ゝ舟　琴太

冬をかまへる蓑は砌陳　居逸（護府）

ふるゝる音乃伽羅の月　我堂

かゝる通書の例ハ何くゝ　柳斗

月も文ゝをの〻立ゝれ　逸

蓑麦ゝるまひゝ舟ハ春ゝ　太

文ゝ也松代領乃寺林　斗

磬一ゝのゝ三度乃ゝ世渡　堂

きのゝ三度乃ゝも春盤　太

ゝ原風乃ゝ田ゝ也ゝ　逸

ゝ鶴の手も　堂

恨ゝ原さゝて　斗

酒ゝ只剃のゝ　逸

詩ゝ笠ゝ梅のゝ　太

ちぬの浦に漁する海人やいさらを
春の日の長き日を繁
源氏の宮廻の雪消の水ぬるむ
あしかの蘇おもしてもよしく
三法師の頭髪乃芽
やるかなきなき此毛をもさし
花近の日よく晴なるとう
編戸の家不乃毛やらふ

汁
堂
太
逸
汁
堂
逸
太

なよ竹の雪消の水ぬるむ
牛羽人を馬ぬ
くるるる青入之利家し
只雁乃あしを夕ぬ逸
遠久の花は特乃古袖子
簾魚のまて鶯を見糸
秋あつき雲乃ふ身此屋なさ
竜川の家乃宮雨降山

汁
堂
太
逸
堂
汁
逸
堂

ナウ
大なされて心くるしき後の事
まいらせまゐらせ奥ふかく　汁
白河のとなりなる仏道心　太
堂
なまめかしきものの姿　逸
打うつ後の床も花遊　太
柳　撫子　汁

雪杏舎真行

蓼太

寄事や小屋の外に雪掃て
掃てあまりの雪の名残　盈行（駿府）
柴ふ細江の手ふる友よびて　周竹
あるる貧ハみな鶏なり　雪敲
月見まる屋たく淡雪　郎娥
角力の君の奥さまも　月巣

松の尾社縁とはいえど酒肴　行
抜手ふ毒理なる魚買みり　太
也川とて百万も伯父菅抜へ　敲
僧のさて祝も出人迄いろ　竹
世ろ元元賢さまを付とて　巣
外川仮乃奥手冷あく　蛾
ヲ脇て夏なき霜の御虎　太
出ぬ人ぬ出ぬ行の香　行

今まて伽羅堂人を迎也一　蛾
寅唱食社寄遠と文殊寺　巣
花生也一行まて乃を鄙　竹
三尺さう苣乃河畔　敲
十　まる風よ迎ふ後く弱法師　巣
溢をきけて江口さ〳〵や　蛾
墜たて〳〵本具もあり　行
名ちは流まて鍛と尺毎迄　太

蕨とる小道姫とる谷の奥北宮
をてもりぬむらし　六法　敲
たてきりの香は一百年もなし　竹
月安さし光山の二ゐれ　城
更ふ茶釜八百枝の松の風　巣
月を隠ふ秋の夜神楽　竹
うしろの鐘入谷の人たゝ　敲
道くるさ菜萸の蛋　太
行

古寺ふる里北九州　敲
いくつ掃てもの庵　太
なほもつかく咲て　行
自撰の柄とよ鞘時　城
結ま八重ふ食姫年玉ふ　巣
を一合袖と八重さう人　竹

竹室興行

桃谷は菫ゝ何ゝ無き柳こそ撓　琴十

くり川とれらる馬の衣乃友　駿府 枯友

山松の瀬ふ古紙ふゝる比れる　嵐考

一脛絶しはたとこふと出拵　浦舟

角の茶ん月の何ゝし乃中拘　松峩

拾梅すふゝ　日雇ちりく　枯泉

ウ

尾ゝく葦牧の何ゝ駒二三十　友

曲突と時めく館のありさ毎　六

朔日は袖あらくとおみかくる　舟

むら腰立は欅桶のよけあし　考

今れるふ瓢箪町乃弁そるつき　泉

滝の中とと紙毛　隻虫　峩

湯ありはろしるま月はふさふ色　太

聟讃ろむる　臨済の縁　友

荒さてゝ建武の山はたゝ
沢さく鶯の卵さそうまし
ゆ紅いろく色ふかき思心
宴曳乃ゑ此紅葉不れつ
黒塚と骨正月を答あり
さ八神西の出帆八まんせ
肌ぬくく出此まの御のかまて
睦ゆゝ世帯とよゝまれよ

嵯泉舟考嵯友太

梅探新園ゝ早此を的ア
むりくと紅ゝ結つきまり
逢実此むうとしの絶さう
俵のまゝ年反さ逢ゝある
お使ふ鯛の宮もさはゝひ
菓漬のゝまに有的の舟
風ゝきさゝ川旅衣ゝもふ
乃ゑまゝより此お場高ひ

考舟嵯泉太友考舟

そまくと船出の雲　友
側うちかたる高槻の酒　太
ひさうち席絵の壁ふさ山の月　舟
三日六のうち馬入とせけ　考
雨風のきたるとなる雲　泉
夢覚くと梅ふるうち　峩

映雪樓奥行

小室屋入梅ふ客もあり下すうち　蓼太
部を絵まる覚山乃月　陵南 杜口
改元のうれいも限者ハ　荒振
此名ひうち趣ひうん　巴明
仮性のうれを覚まうせ　鼎蛾
いうなる帰る雪の門く　太

ウ

不細工な大牛之子も世あり
名ハかゆとも　酒と　三献
麻さふり比まぬきも知らぬ松冬
墨染る　染の　肩と　荒　つ
舞ふさして扇も損じ骨斗
いろく　きのふ　形　人まで
とく心月入出汐の浪しぐる
竹あハやと　関　比　行　燈

口　振　明　娥　太　口　振　明

行ぬさく野望に広くまでハの窓
治　経一　部　唐　の　古跡
解ならぬ嘶　鐵の　葉ならぬ
針出り海　松の　画　扇たり
十
何とゆう羽なき孫おほへしき
思ひし中　波の　紫　濱
畢丸の庭中小山までし
雇　交り　此庭との賀　興下

娥、太　口　振　明　娥　太　ハ

姉君入肥之後ひさしく
双六の月もくらす憐れなる
梅嶺入江国を遠く捨てられ
友離る　紅塵の夕暮
硯の海に紙ふ手あまた
箋間にくる那須の恋路
青の月静かなる栗ふ条にて
二百十日もよし世中

振　明　太　口　振　明　太　口　振　明

ナウ
約年ふ入江さかりの大古舟
ものものき里北動解由三代
味噌石炭書面五月別帯
虹よかるる海る日和良し
行幸待宮家別二三度
芝さまもかくる紙を片田

太　口　振　明　執筆

呆々菴奥行

山乃端のさくらをうゑ初橋　蓼太

まさきを踏てゆくも又雲　凡子（攸府）

袖うへに仏をうせのさくらかな　〃

くれそのゝあるさくらの一本元　太

十日てふ春くるゝ日ぬ水の月　〃

過なゝ　ひの仏秋の月　子

ウ

寺院寂然老の愁をうれ　太

お僧屋ゝ元すゝ冬　子

明やすき廊乃夏北時ゝ　太

そよく夏の蝶も庶子　子

象のあるすゝき旅の姿ゝ連　太

志津のかゝあれ垢離もげふく　子

稲妻のゝ月れる月と　太

拭わたる乃の月　子

たゆくとゝ大樹あり菴へ隠るゝ　太
ゝの主歌を連ねたゞ云　子
山ちゝ雲掃とみの佛書舘　太
帳の巣ひゝりよりも洗れを　子
十
かゝるゝ宗風愛徳ゆるる　仝
あ分ゆるしあ動化性と　太
行ゝ向ゝ自然ゆ清を分むゆ　子
憂為舟乃鎖を解く　太

ゝの番の陽ゝ伽羅を乎徳　子
人僧ゝゝ小町をみき　太
摘ゝる冬七種ゝ仏く　子
ゝを行ゝ国ハ春の水　太
仏ゝ山ゝ新月の白雲山　子
板乃板ひゝ拾ひゝう　太
安庵ゝる剃者も施ゝ出合　子
面ゝゝ板ゝく院のつゝく　太

代君と行の名残あり　太子
十三　旅の哀吟をこそ　太子
書あつめ家をこそ　丶
いとは遠き北の家　丶
風雅を潤す業の連歌　丶
五日　北の風を吹

臘扇居與行　蓼太

秋あり　や遠の冷あり　蓼太
寒さ忘れ　と松ふり　橋　夏爐（筑府）
所役の幕　ぬる涼　瓦子
今度の貢　み帰る　蔦人
扇入月　晴き蛾　炉
むくと苅穂の　居の森　太

一荷供鏘の主る人とゝみ
ゝゝゝゝゝゝゝゝく伯母の云伯
母くゝと云るまゝ大母乃後ゝまと
なゝ屋ゝ菓子も和祥食乃と
識法の禅ゝ河寄る沸仏蓮
ゝゝと薮戸北浦波寄
ゝゝけゝ屋手細乃里ゝと河
子北ゝ男子ものゝゝ実

人子太炉子人炉太

なきゝ為ゝも書ゝ記言ゝ
条ゝゝる乃ゝ銭ゝ丸
投入ゝ小瓶のゝ花乃咲ゝ乃
旅郵ゝ見あゝく連ゝ子る
ゝくゝゝ取ゝ一仏の祝ゝ
佛と無ゝ乃ゝ六ゝ
敷ゝれゝ試業の証を押ゝ
ゝゝゝゝ書の盃

人子炉人太子炉人

徳あんみる暦入巻子一志川こ　太
物き　髪を自慢らさよ　子
形くよ私ども庭乃島干拍　人
聖八洞の巻を中さいや　炉
我袖て歩こ史のかゝ元　太
巻さく里ども冬とま分　人
身新ら巻と懐まる板ひさ　子
ともも路路入数へも せん　炉

ようゝ　ゝ中如き仏るまて巻　太
生滅くと接くそのも　子
出る帆乃こ川如こつ入川乃つ　炉
法まんこ地て お場あま　太
ら言ども光のこけき毛の宿　人
弱き有くくと有も根まも　子

時雨窓奥行

片枝を吹てかすかに聞て夫

日暮れ行き蔵下さく嶋　左州　竹麿

獄舟泊の正宗顔ふ絵立て　浣石

徳て雲ふ雲ふ雲ふ紙ふ紙ふ　周竹

いの川方も皆八束脛此身の秋　月巣

雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ市入ざけ口　太

琴太

ウイ

掃寄ふ雲ふ紙射ふ雲ふ此世幕　麿

白ふ川　巣乃せふ川掃きふる　石

掃掃乃ふ雲ふ酒をけ雲ふ　竹

雲ふ　麿つ雲ふ夕雲の雲　巣

号庶ふ雲ふ雲ふ紙ふ雲ふ鳥猫　太

傘　もおあふ紙ふ海中　麿

紙の雲ふ身ひふ雲ふの冬桂　石

巣入ふ雲ふ此ふく口切　竹

さゝ波ゝ世世と浪を引すれ　巣
梅　麻ゝゝ住まゝ条きゝひゝ　太
蘖（ヒコバヘ）乃　芝も無ゝゝ世さゝゝ　麿
そゝる日たゝえる国柄の岩松　石
十
正月の伯連ゝ千ゝよゝ初ゝゝ　竹
志の字きゝひの岩ゝ君ゝ爺　巣
ゝゝきゝ千ゝ芝乃ゝ雅編細　太
せゝの小川の鮒を吸ふ　麿

農ゝ世と月ふもさゝやゝふまゝ簾　石
大工めゝゝ千ゝ国ゝ住ゝゝ　竹
情ゝ屋ぬゝかゝる無ゝ関　巣
きの乃ゝゝ世ゝ乃ゝ　太
ゝ川さゝとまゝ波ゝ特ひゝ川　竹
湯ふゝ乃ゝ住ゝ勝ゝ乃殿　石
知月ゝ簾ゝゝ隠ゝ世ゝも　麿
命ゝきゝゝゝ石ゝ川ゝん　巣

ナウ
夏法師の庚申する秋の風　太磨

鞍を馬に法師乗せし　巣

八ツ橋と磨ぎ嶮八ツ橋の雫

毎日くに曲寒の蝶そき　石

隣ある宮の後河屋洲屋　竹

中よくも冬の輪乃独り　執筆

伊豆国より駿河の国へ行日数幾程にて五
ちゝ八ツ橋の頂きと八ツ橋の雫の
三ちゝふ屋くもあゝ程といはやあ宮乃山く於そ之と
一日時雨窓中より山めぐり幾程ぞ　後府連中

足高　白帆乃あ乃ち乃不二詣　蓼太
賤機　牛買ふ窓北賤機織ゆく　月巣
花沢　何ハなゝ　とと夜と乃さふく　盈行
　　荒振

音羽　月をまつ里の思ひ出ぬ時あり　之仲
籠鳥　荻　荻ふける加賀地方の人　榛　須广
小康　数世の榛名の山の山路にて孫も　桃壺
八幡　花さく〜名やハ幡〜　千瓢　秋耳
當国　紙衣乃裏ゆ〜くも松月を月　杜口
内房　はる〜と羽華簾〜川姫さま紅　我堂
有渡　何佛君なく〜立仏かな立人　掬斗
淺畑　鶴ハたゞ姫ぬと　菜友

牛妻　紀の国〜佐毎上りなる友此雲　格友
高仲　あ〜鶴なるく様さけなり　浦舟
龍仏　一ちきり有相無相と様まもり　技老
小野　お不絵堂の不乳月の参宮　瓦子
手越　折てもち苦みなる柳　艶　賀道
鳥坂　雛乃いとせもちきる丁絵　嵐考
宇津谷　あさ海〜角宮家伯孫を手〜〜　郎娥
蓋尾　新耳　ゆ脇〜蓋無此はさ〜〜　梧泉

薩埵　子を姉より離るる女房とさゝぬのと　聲潤
久能　松ゝと明るゝも能はの乃初潮　茶腹
松富　世やまとまゝ川ゝ人ゝ　まふ梅暦　巴明
内牧　雉ゝ日くゝと二羽ゝ　ゝ松ゝ山ゝ　夏炉
安部　ゝ生ゝ此ゝ編綴もなりゝ　此其
足久保　阿因不ゝ山ゝ今ゝ　滝下　葛人
猪原　あゝゝゝ三ゝゝ京ゝ　月圭
皆峯　那ゝひゝとゝ川ゝ　公ゝ　蒼物

鳥帽子山　菊月と伐ゝ　ゝ所の月　居逸
星山　何ゝゝゝ天漢　ゝゝゝゝん　曳義
帆掛　秋ゝ　ナウ　孫尾乃醤ゝ　徒利　月可
愛宕　仇事書ゝ　ゝ　月仙
蓮穂　髮の　ゝ不ゝ　ゝ　嵐十
千葉　肥ゝ北ゝ　ゝ　毎日　嵐舎
船山　花姉ゝ　ゝ　山ハ行下り　氷花
高根　ゝる　ゝ　鵜　ゝ北ゝ　夕栄　斗南

惣雪亭真行

[illegible]　　參太

[illegible]　　野莊

[illegible]　　琪山

[illegible]　　富屋

[illegible]　　壤歌

[illegible]　　太

[illegible]　　莊

[illegible]　　山

[illegible]　　屋

[illegible]　　歌

[illegible]　　太

[illegible]　　莊

[illegible]　　山

[illegible]　　屋

破らまほしき網と鶴を捕らんと
絵をかくに心を筆に任せ
ぬれば花の大きさ
風を使ふ事かくの如し
出家なれども面の老女嫁達者
さしくはつてつよ神もこれ
を除ふに似たれども
不二を求室ふ事なかれ

歌　太　荘　山　屋　歌　太　山

温泉を春しるむ事
哥ふ事なかれ健者なるもの
讃物の二八河傳を作と
菊　桜　蓮　冬の松あり
恒　越　加茂　衛入生ます
代　猫　雪　踊うらく
月　小　屋　似合あ紅の唐ね織
踊　乃　中　踊　花　あむ

荘　屋　歌　太　山　屋　太　歌

十ウ

所うらを辻宮年北一百万山　荘
春雪　八重よ吉橋　歌
出らくのうかはぬ松の今ん　屋
京をれ堂うの山佐　荘
石川をうえ宗も兵後黄　山
連歌　宗祇　宗長　執筆

芭蕉翁奥行

菊太

菊きせ弟子の者と実乃重
歩ごら色く舟の友摺　可来
猿笠菊亦面ぬ菊子菜子落　一鷺
猪当毎する加ふ屋る之　太逸
言根ふ究意一乃松の母　来
ふ　第　沈き　紙玉孔秋　太

逸鷺

太来

逸鷺

太来

逸鷺

太来

逸鷺

むさくるしき法師の富士に者
あるなん船をよそふ者なり
源氏屋もまた樊噲が鴻門
宴討ものを孔子面く
心相なる磯上の泥をとみ高
毛と坂をえしらん不出
入ひすの風呂の書の身
接まし不柳もなく

太逸来驚太逸来驚

十ウ

なに河のおかつりおとを孔むく樊
墨船管笠の くもり高ひ
坂時すをひ繩を毛
指なる なけ紙一
繼入る毛の花乃舟をよひ
毒日にうそ皇 板面忽

太逸来驚太逸

三級亭興行

帆掛け帆のとゝ[illegible]の海　蓼太

人さゝぬくまのとゝむ　漁　楓宇

古里は二里入るゝ[illegible]　林朝

[illegible]　岩蓼

此厨入をゝりいゝ[illegible]月　魚文

秋風乃のき北あゝゝ何　太

初[illegible]の貴主と菊の賀[illegible]衣　宇

[illegible]と屁を[illegible]　朝

[illegible]　蓼

昼顧くゝ[illegible]　文

[illegible]り[illegible]孫ひまゝり　太

[illegible]　宇

橋の[illegible]の[illegible]　朝

[illegible]紀伊の川[illegible]　蓼

文字
太字
朝葉
文字
太字
朝葉
文字

朝葉
文字
太字
朝葉
文字

ナウ
秋ふかき山寺の高殿に
天蓋とかゝる梵論の
おもかゝ
七景
花ちる時の
とひとつ
あとゝ

朝字文蓍太

閏三月

執筆

三級亭真行

松山やまゝ中より廉の影　蓍太
新積る月の例乃嶺　芳什
酒醸杜氏う袖ふる秋の来る　如風
うゝ
お鶉の
あゞ
剛ハあ
標乃一八

蟲薄
孤輪
魚文

彩水上男女を取てやし　九包
先てのうれしかるの意　至九
桃紅を出せる左女牛義ふる意　風
女房おぐしを撫もてのれす　輪
仇解は菜漬をあくり洗　薄
山鉢うきを冬孔を捌　包
罪を悪むし信夫の里入月　什
春百日花入世話　輪

幸若小説ひらく魔取を
ぶるとも北くくの毎の夕べ孔　九
いるつきの春きき孔乃地河より　文
ちの義宗と思ひ合る　薄
義と豊ふ浦を夕日孔袁鶴　太
裁ハ側うち志めるたるさ孔　包
ものなんとうとまふ義ふ　風
破軍ちの出く既ふこ云　文
　　　　　　　　　　　　　　　九

雲林院菊園にて
桜つゆ屋と色もよろしき尼　薄
吉原の十とせ過る人知れず　太
根ざなん博と縁のうしやる　輪
あみ笠の義経菊の時雨道　風
ひとり寝の夢遠扶ちまぶ　包
さしぬき袴うち月の秋もし　丸
理分の好ち為ふ破の笑　什

春さんさる和尚と人あ古人工　薄
多うひまさ数とふ川盃　丸
神の鏡乃胴意まうる青磁と　什
ちり岩まうちの鄭乃誉　包
礼を弘芝うち家義の春　風
中ぬきそこの世界なりあと　輪

雪中菴真行

蓼太

雪もかくとそうたんに垂れ籠

いさよふ月ももたれて花柳　李渓

菴前ふぶきの雪をまひをして　全

まさに千姿万態の一間禁制　太

小窓ちらつく雪はゆるいあり　全

降りそそぐ雪のさく　渓

眠る間とはせしくと降り敷　全

帰雁荷蓮する鈴せの雪　太

ふきれの塔井よ雪の橋　渓

鏡よそまさく紙屋冬の宵　太

癪痛とおぼしくむくと起て　渓

降ふせ乾まる屋文を　太

思ふるみの色糸繰さく　渓

奥くといれば桂おとこも　太

ひとすぢあやつき庭を進うて　溪
まうるとう宗宇の稽ひつ者　太
香夢乃湯まも苔なく花の陰　溪
るよのうくうりかまむ丸立　太
十
門のひと汗いれる春の風　仝
姫うりはの不温泉女もまを　溪
下秋汗見かるる憂心のき秋　太
線うはくく市孔船記　溪

重ふ茶碗をうき惜きむう雀　太
庭のうもうもまふ市像　溪
私庭の時庭うう孔茂うひ　太
金ふ仇ふるとのうをふれ　溪
虚空の千代事ふ建ー柱柏　太
翼ふかうあ籠ういをつま　溪
陶器の風やくに汽ふ更立　太
ふまうまうあうも例幣の供　溪

十ウ

[illegible]の耳ひきおろく嘘[illegible]　太

思ふ桜ふ繰うみてあるる　渓

[illegible]桃[illegible]　仝

[illegible]も清[illegible]　太

[illegible]山[illegible]　仝

いく[illegible]三[illegible]　渓

銀雨亭真行

[illegible]　蓼太

芹摘あ[illegible]　翠兄

提重ふ二日[illegible]　仝

[illegible]　太

ひやくとる松[illegible]風　仝

非[illegible]竹の長　兄

ウ

ひとつゆ雲をとる堀さうゐ　太
辰姫しの紛化大松　兄
五年振ひとて笙乃迎ふ度　太
ふい菓ふ三姫きぬ宮浦のうち　兄
已祭の人奥ふおとる蚕ふ音　太
市乃ひもあふ金筆乃せとの　兄
浦せふ宗伽振乃松堀ふ縁ふ　太
是鏡とく毒小神とる毒　兄

十

振出ふふ紀伊もの茶渦　太
逆ふ川ても形紅ハ山く　兄
月を紫花を金袋ふり　大
海苔ひき弱ふ音の浦外　兄
揚屋ふ伽逆ふ孝ふふ　全
伊勢や日向乃秋の百逆　太
野崎ふや一すふ帆ふふ　兄
柄杓ふ冷ふ姫酒乃ふふ　太

神祇は立ちまき清まして　兄
仏とも国を楠のうりはは　太
雲ちかくそるかぶはの雨やりて　兄
十数万騎を尾のあぬりは　太
翠黛山形もうるかる古陵　兄
鈴なり夕雲門ちる埃　太
ちるのの元寇船も九日まで　兄
つもと尾張乃暮もかるる　太

氣船のぞくく四日ふるも　兄
世を義は万仏仏学寮　太
無臨の見来なくと掛ちる　仝
只ちくくと太布の筒袖　兄
仙人乃碁盤も花のさくれ石　仝
いのまく雲なるん　執筆

春野亭真行

[illegible]ぬまを[illegible]帰[illegible]ぞ乃而　蓼太

柳さくらの梶の古庭　班象

稚田[illegible]ぶ[illegible]ハ二神宮を　仝

[illegible]仕[illegible]神[illegible]ゆ　太

松明の拾[illegible]ふ風[illegible]　仝

御[illegible]の[illegible]山　象

ウ

高ひの社神[illegible]る俳諧九七

九損乃鞠と釈乃ゆ[illegible]　象

お傘ふ影あ[illegible]を[illegible]す[illegible]　太

あや[illegible]と[illegible]の意の社扶　象

[illegible]ると[illegible]の[illegible]扶子[illegible]ら　太

大乃乃物の[illegible]ひ[illegible]　象

盃り神酒[illegible]つ[illegible]　太

[illegible]物[illegible]ふ　象

乙吉橋を帰路のこゝもとりて　太
京の末乃百姓小麦一反　象
去暑き記のかゝる男の丸裸　太
条ゝよりの日と明を懸く　象
十
素堂屋より去里界之ゝ小鍋立　仝
余所の男ひとり無きやゝ　太
雪素孔百里余ゝる年忌乃　象
出京帆入る帆乃私十艘　太

夕晴の杜稗ゝ蒔て不二飛波　象
去ゝ里身乃御仏乃　太
乃毋と餅と三日孔拾ひ鍋　象
解く去ゝ京ほゝ三つけ芋　太
三ゝ孔ゝ所使く猫ゝ蜘蛛ゝ　象
床越ゝ去ゝり秋の沙先　太
月ゝ記相ゝ沙のくと西瓜松　象
遠ゝ川出の記敵あゝ世る　太

十ウ

仮名の古紙を紙屋紙　　象

堀川をゆくを網戸やり水　　太

冷あるこころのまくらもくるる　　象

万川こころと暮れ後を指すも　　仝

夏炎ふ下陰かりこの花蓮　　太

涼やこもさしいろ　裏　一日　　仝

夜雪菴興行

多風や後まるまるより　庚海　　蓼太

茶をくゆ後の仏　　普成

梅を玉の山をくるる　　雪珊

忍月まてを藤棚をある　　子交

もの秋の連歌を吟ん　　成

秋のなをひ入る只ひ海　　太

ウ

花うるはしき御書に梅本実を
刻みて入れむのみ、破ら[illegible]
御書に恋の歌つむ花孔雀
若鶏（ヤ）雪の松会に八重
南伽羅尊の花系
まゆみ紅葉と並
鶏とまる小竹の末みゆ
されて[illegible]姫[illegible]子の早合

交
珊
成
交
太
珊
交
太

十

月まつと立て孔雀の絵屏
鶏乃鶏冠に鶏の羽
汗ふきのく花の美さう
乃ふまと杉本寿
童の歌ふ刻月桂の鶏の軒
我の使手つまと小嘉笠
花さきのむ梅の[illegible]白尾美
[illegible]鶏[illegible]帰[illegible]

成
珊
太
成
珊
太
交
珊

[illegible]の大預り　成
[illegible]金[illegible]　交
[illegible]の[illegible]　太
[illegible]　珊
[illegible]　成
[illegible]　交
[illegible]　太
[illegible]　成

[illegible]秋の風　交
[illegible]七日[illegible]　珊
[illegible]　成
[illegible]の夕暮　太
[illegible]大和川　珊
[illegible]

銀花亭奥行

蓼太

雲むらの[illegible]の[illegible]の花
[illegible]ぬるき　斧の[illegible]　山[illegible]　竹奴
[illegible]　文母

[illegible]　太
[illegible]　奴
[illegible]　母

市中[illegible]
二[illegible]　[illegible]
[illegible]　太
[illegible]　奴
[illegible]　母
[illegible]　大
[illegible]　奴
[illegible]　母
[illegible]　太
[illegible]　奴

[illegible]の[illegible]の[illegible]　毎
[illegible]月の[illegible]氣　太
[illegible]の[illegible]雪　奴
[illegible]山の[illegible]風　仝
[illegible][illegible]　太
[illegible]　毎
[illegible]　奴
谷川[illegible]　丸　末一本　太

人[illegible]の指[illegible]　毎
[illegible]　奴
[illegible]　太
[illegible]　毎
[illegible]　奴
[illegible]　大
[illegible]　毎
[illegible]月[illegible]丸裸　奴

ナウ

[illegible]の百人一首

[illegible]　大

[illegible]　毎

[illegible]　奴

[illegible]　太

[illegible]　毎

[illegible]　執筆

椿晴舎奥行

[illegible]　蓼太

[illegible]

[illegible]　花明

[illegible]　水鶏

[illegible]　和水

[illegible]　明

[illegible]　太

法楽の連歌終る折りくす　水
仕事へ忘れ訴状一通　鷄
睡る女荷葉に涼まし　太
早月躑躅に夕日晴めく　水
帯ほとき宿ふ峡の麿取嶽　明
望うつし入技葉捨葉　鷄
のけさまにんと伸る草枕　水
足音消えて秋つまるまで　太

都への西石垣乃行しき経　鷄
世の志そうめんと豆腐なくんそ　明
月花の亡人かゝふ事しき秘　太
貼号掠すゑの安さよ　水
十
出も麹乃名あくる丹井河　明
雅や謡ふ風の吹ゆん　鷄
手綱し宮千枝出北不せき　水
子守きりて禮なれとも　太

さて法師は蓋てるおりを一枕　鶴
のくふさをいまは貢さ毎て　明
まうしはりもくまの古き道　太
いさ百度をかくり明さん　水
若い前ふ神をしりて下居ん　明
流水りゆをの納屋のやう　鶴
ゆ武蔵の高麗を掃て身を　水
見あげて秩父ヶ嶽山　太

十ウ

見なをふ法師を合を手をうち　鶴
毋子二女をとりて投ぜん　明
誠ぞと隣しの円板ひ　太
姫明ぬ川を渡りかれも　水
三ぬ小枝を車　鶴
顔をやくしを風を婦き　明

芭蕉庵奥行

[illegible]の[illegible]の[illegible]の蹄[illegible]と　蓼太

[illegible]り[illegible]秋を[illegible]る　遠州　以席

一すの[illegible]も[illegible]和平　蓼主

[illegible]肉を[illegible]く[illegible]り　菊平

[illegible]の[illegible]陳も[illegible]の[illegible]　席

[illegible]冬の日ふ心[illegible]も　太

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]　平

[illegible]論[illegible]新を[illegible]る　主

[illegible]の[illegible]庵[illegible]　太

[illegible]を植[illegible]根[illegible]　席

[illegible]の[illegible]代[illegible]の[illegible]　主

[illegible]ふ[illegible]く　平

[illegible]月[illegible]雲[illegible]　太

[illegible]松江の舟　主

[illegible]と[illegible]葉を[illegible]
[illegible]の[illegible]を[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]ゆく[illegible]
[illegible]行く[illegible]
[illegible]をまち[illegible]
[illegible]女のなげ[illegible]
[illegible]

平席
主
平
席
主
平
席

相模の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]陣[illegible]
[illegible]も[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

太
平
主
席
平
太
席
主

ナウ
枯萩ま伸ばす事も本の夢のう　平
旅の寝ぶ所の湖もつさよ　席
又文ぬき三文ぬいく繪そのり　主
ぶ　ま文ぶ事ま　平
紙機ぶ言ま　席
播ま絶ぶ　主

芭蕉菴真行

伸ばす幹を定る梅ぶ　蓼太
さぶ掃日の縁ま雪ぶ　孤月（遠州）
千金ぶ行ぶ月ふ豆ぶ　玉人
ぶ人会ま　片人
幸いま胡椒ま　楚狂
ぶ之の葉ぶ　太

ウ

夕くれの雲　月
秋ぞ知る　紅葉の
ふるの事　玉
ふるの事　女郎花
小野の事　片
細石　牡
蓮台　鹿
蓮台の事　一
石の　太
石八　て
川限の　月
紙入　秋おくれ
秋　片

ナ

蓮台の事　蓮
まつ　蓮
の　尾
秋　紅
紅葉　月
紅葉　牡
腰　千
腰　片
腰　玉
角　牡
南　月

[illegible]の[illegible]の[illegible]　玉

小野の[illegible]の[illegible]　片

瀧川[illegible]の[illegible]　太

[illegible]と同じ[illegible]　牡

[illegible]の車の[illegible]　月

[illegible]の月[illegible]　片

[illegible]　玉

[illegible]の香　月

ナウ

[illegible]入[illegible]根[illegible]三[illegible]高　牡

[illegible]利[illegible]　玉

[illegible]の[illegible]の[illegible]新　片

[illegible]根の[illegible]　月

[illegible]　太

[illegible]　熟事

寒蓼堂真行

蓼太

芋掘る根元ひたひたと

あらそふくるまさるる　鴨　千慮

賜めて庭の暗き太刀佩く　婆心

蛇穴に入るや風の名残　巻耳

夕貧の鶏場に入る月　丹頂

蕎麦ばたけくく入る　可夕

成程の尾も離るる蓼雲　慮

長下入歯いりの秋の　太

一さとり聯句入懸と手屠　耳

離かるる　入姫屠心

沢山の小型孔雀屠　夕

吏りりりの舞の　頂

ながながの濯ぎもむく袖ばりく　太

青蓬の三寸五尺月　慮

深きる帆のゝ高きゆめ頂
河邊とまりる夫程勤遠耳
なのゝしてを〻ゝ花の御廣き心
承恵事まもやむゝ薪刀太
月菜孔ちゝ高きゝ遠廣遠夕
七歌合の篇ゝ紙識頂
形修恨なるゝ人亞日年慮
指子高姫のふ著之弱る篇耳

度秀ゝ望八〻と絵ゝ夕
醉ゝまゝるゝ世やせん心
著程京都京と雪も足寄太
遠と破子矣ふ射ゝ著慮
京絵とかなゝ人あふ力頂
程ゝ矣ふる俗御ゝ何〻心
第もゝ不ゝ色孔書高夕
鶯ゝ年秋ゝ京ゝ高ゝ耳

冬至後ちかう成と人まひ慮
雪原なりゝまゝ悔なり太
り山あひのよるの月て一まるき心
筆四又射て砌まゝ夕
年礼のおくまゝくるゝ家耳
里と蚕の拔蝶そのゝ頂